

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0855 ◆◆◆

25/08/27

【「価格分布帯」復活、ドルの上値は 149 円台が「鬼門」】

今回の当レターでは、かつて定期的にレポートしていたが、最近はずっと取り上げていない「取引の価格分布帯」をもとにした分析を久しぶりにご紹介したい。

ちなみに、最後にレポートしたのは、2021 年の 9 月 29 日付。4 年近く前の話になるので、初見あるいは忘れていた方も多いと思う。「基礎のキ」から話を進めていく。

◎ドル安方向は「142-144 円台」割れたら、新たな「フェーズ入り」

「取引の価格分布帯」とは、「日々の取引の終値が幾らだったのか」を過去に遡り集計したもの。

筆者自身が「変動相場制以降」すべてについてまとめたところ、「最多取引価格帯」は 109 円台で、実に 393 日を数える。また前後の 108 円台は 380 日、110 円台も 308 日となるなど、過去を振り返ってみると 105-111 円台の取引が「極めて厚かった」ことがうかがえよう。

そんな「価格分布帯」において、前述したような過去の取引が多かった価格帯は「居心地の良いレベル」とされ、抜けることは容易でない反面、取引の少なかった価格帯は「居心地が悪いレベル」で、アッサリとスルーしていくような傾向が見受けられる。

たとえば、先の事例に補足すれば、112-116 円台は逆に「取引が薄い」。つまり「価格分布帯」の観点からすれば、比較的值が飛びやすく、111 円台を超え 112 円台へとドル高・円安が進行した場合、一足飛びは言い過ぎにしても、次に「取引が厚くなる」117 円台まで比較的早いタイミングでドル高が進行する可能性もある——と考えられるわけだ。

いずれにしても、そんな「価格分布帯」による分析を今回数年ぶりに復活させたわけだが、それによると今年のドル/円のコアレンジ 141-155 円台の範囲内で見た場合、ドル安方向は 142-144 円台が「やや取引の厚い価格帯」、それに対するドル高方向は 149 円台が「やや取引の厚い価格帯」になっていることがうかがえる。**(下表参照、横軸が取引価格・縦軸は取引日数)**

これを頭に入れて、実勢相場を振り返ってみると、7 月上旬以来ドルの上値は 7 月 31 日に一日だけ NY クローズで 150 円台をつけたものの、翌日にはスグに 147 円台へと押し戻されていた。先で指摘した「やや取引の厚い価格帯」である 149 円台が強い吸着性を見せ、ドル一段高への進行を阻んだと言えるのかもしれない。

よって、この先も 149 円台というのは「価格分布帯」から見て、ある種の鬼門と考えられる。しかし実は、149 円台を「しっかり」超えてしまうと、それよりドル高のレベルには「価格分布帯」上の抵抗がなく、青天井ゾーンに入りかねないようだ。再びドル高に振れ、150 円台に乗せてくるような展開には十分な注意を払いたいと思う。

それに対して、ドル安方向は「やや取引の厚い価格帯」である 142-144 円台が、目先は強いサポートか。実際、今年の 4 月にドル/円が急落し 22 日に年間安値 139.89 円を付けたことがあったが、同日の終値は 141.60 円。さらに翌日には 143 円台へとドルは一段と値を戻しただけでなく、それを含め 4 月以降でドル/円の NY クローズが 141 円台以下になったことは、たったの 3 営業日しかない。

したがって、こちらも 142 円台をクリアに下回ってくれば「新世界」、新たなドル安方向へのフェーズ入りとなりそうだが、それは容易なことではなさそうだ。

結果として、8 月 13 日付けのレターで報じたように、「140 円台後半を中心とした広義のレンジ取引が予想以上に長く続く可能性」——ということになりかねない気もしている。(了)



